復興を足がかりに蘇（よみがえ）る えんま通り商店街

新潟・柏崎市 2007年●平成19年

里中高志
Satonaka Takashi
illustration：Shigeyuki Sakata

新潟県柏崎市。日本海の波濤（はとう）と佐渡の島影を望むこの町は、古くから石油の産地として知られ、また北国街道の港町として、越後の経済の中心を担ってきた。

柏崎に住むお年寄りにとって、震災の記憶は1回ではない。1964年の新潟地震、2004年の新潟県中越地震に続いて、2007年7月16日に起こったマグニチュード6・8の新潟県中越沖地震と三度ある。三度目の時、柏崎市には死者14人、負傷者1664人、建物被害2万8406棟という深刻な被害がもたらされた。

明治6年創業の老舗「紺太」の社長である中村康夫さんは、衣料を総合的に扱っていた店舗が中越沖地震で、大規模半壊という被害を受け、先祖から受け継いだ事業を縮小せざるを得ない状況に立たされた。

中村さんが店を構えていたのは、まちの中心地にあるえんま通り商店街。その南側の「下町」では7割以上の建物が倒壊するという甚大な被害を受けていた。

「災害によって壊滅的なダメージを受けてしまいましたが、商店街を一から作り直すことで、新しい未来が見えてくるかもしれない。それまでの状況から脱出するための、ひとつの機会と捉え直すことにしたんです」

震災から二ヶ月後、商店街の店主たちは、「えんま通りまちづくりの会」を立ち上げた。そして、中村さんはその会長に就任する。

えんま通り商店街は、閻魔様をまつった柏崎市指定文化財「閻魔堂」のお膝元として栄えてきた商店街。だが、全国的にも商店街の空洞化が進んでいたことから、同商店街も集客力の低下が懸念されていた頃だった。震災からの復興を機に、新しく蘇らせ、賑わいを取り戻したいと、「えんま通りまちづくりの会」の人々が立ち上がった。そして、その会をサポートし、行政との調整役を担ったのが、UR都市機構だった。

商店街を新しく再生させる

中越沖地震が起きた2007年、東日本支社ニュータウン業務部業務管理チームに所属していたUR都市機構の山崎龍二は、突然の異動の命を受ける。その赴任先は、被災地の柏崎市だった。

「私が柏崎に入った時は、まだ倒壊した家屋やひび割れた道路もそのままの状態で、何から手をつければいいか分からない、という状況でした」

と、山崎は振り返る。当時、柏崎市まちづくり推進室長だった本間良孝さんは、はっきり覚えている。

「URさんは土地活用や区画整理に関する国の制度を洗い出して、柏崎市を復興させる手段は十分にあるということを示してくれました。いろいろな情報を持ってくるのも迅速だったので、助かりましたね」

市街地の再生は市町村が主体となるべき仕事とはいえ、震災後の行政処理に忙殺される柏崎市に、調査・検討を行うための十分な人手はなかった。必然的に、市街地の整備改善に必要な調査や技術の提供は、UR都市機構が行うこととなった。えんま通り商店街を活性化させることが、震災復興の足がかりとなる。

「震災前の状態を復元するのではなく、さらなる活性化を目指し、魅力的な通りにする。そのために地元と行政が話し合える体制作りを支援しました」（山崎）

山崎がさまざまな調整や行政とのコーディネートを進めるのと並行して、「えんま通りまちづくりの会」は、毎週会合を開き、新しい商店街はどのような方向を目指すのか協議を重ねていった。中村さんは話す。

「実際に、目指す形の商店街の模型まで作り、小型カメラでその道路を移動させて、まち並みの録画を検証しました。そうするうちに、閻魔堂を中心とした、若者も立ち寄りたくなる新しいまちの姿が見えてきました」

13メートルだったえんま通りの幅を19メートルに拡幅し、新しい通りへと生まれ変わらせる。建物の高さは街並のスケール感になじむ高さにすることなど、18項目を掲げる「えんま通りまちづくりガイドライン」を作った。

閻魔堂があるえんま通り商店街で再建した「紺太」の中村康夫さん

外部からの支援が必要

柏崎市の会田洋市長は、中越沖地震の発生当時をこう振り返る。

「自衛隊のヘリコプターから家屋のブルーシートや崖崩れといった街の壊滅的な状況を見て、『柏崎はもう元に戻れないんじゃないか』。そんな恐れすら抱きました」

中越地震のときすでに、URは長岡ニュータウンの土地を山古志村民の仮設住宅用に提供するなど、支援を行っている。柏崎市は、中越沖地震からのまちの復興も、URに復興計画に関する助言や提案を依頼した。特に復興の核となる柏崎駅前の再生は、大きな課題となった。

かつての石油産業の中心であった、駅前の旧日本石油加工の大規模工場の跡地活用は、震災後、柏崎市震災復興計画のなかに組み入れられる。URが区画整理する土地に建設される市民会館と防災公園には、備蓄倉庫や災害用トイレなど、防災機能を備えることになった。そして、柏崎駅前の工場跡地周辺には、災害公営住宅が建設される。半壊した市民会館も新しく建て直された。それは、中心部に人を呼び込み、コンパクトで機能的な街を目指すという会田市長のかねてからの考えにも合致していた。会田市長は言う。

「URさんの持っているノウハウ・知識・技術に基づいたお力添えをいただいて、私が考えていたよりも遥かに早いスピードで高いレベルの整備を行うことができました。震災からの復興には、外部からの支えが必要なのは、間違いないことです。そして、東北の人たちにも、必ず復興は成し遂げられると伝えたいです」

えんま通り商店街では、牛タン屋や手羽先屋など、新しくやってきた若い店主が活気を呼び寄せている。

「いまは、目指す新しいえんま通りへの道のりの50％くらいまで来たところですね」

そう目を細めて語るまちづくりの会会長の中村さん。6月には、600年の歴史を持ち、数十万人が訪れる、恒例の「えんま市」が開かれる。復興をひとつの足がかりとして、いま、まちや商店街はさらに新しく蘇ろうとしている。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社